

令和 4 年 4 月 21 日現在

機関番号：37104  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2017～2021  
課題番号：17K12332  
研究課題名（和文）母親としての自信獲得を目指したエンパワメント向上の為の看護介入プログラムの構築  
  
研究課題名（英文）Nursing intervention program for empowerment aimed at acquiring confidence as a mother  
  
研究代表者  
加藤 陽子（katou, youko）  
  
久留米大学・医学部・准教授  
  
研究者番号：70421302  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：初産婦のエンパワメントにむけての介入のためには、まず母親になっていくという移行として母親としての役割のある生活になじんでいくプロセスの状態をあるがままに捉えられるようになることが必要だと考えている。よって本研究では、初産婦が母親になっていくという移行をあるがままに捉えることができる測定用具としての尺度の開発した。この測定用具は、初産婦のインタビューをもとに作成されたもので、実状にそくした測定用具であると考えている。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

本尺度は、母親自身が母親としての役割のある生活になじみつつある過程にあることへの気づきにつなげ、エンパワメントにつなげることもできる。母親は、回答することを通じて、自身の母親としての役割のある生活になじんでいく過程であると気づき、自身の子育てを内省できると考えている。先行研究では、母親としての成長の気づきや自身の子育てについての内省が促されることは母親の成長の一助になるとされている。よって、本尺度に母親が回答し、項目らに向き合う事は、自らの内省をとおして、母親としての成長を促進させることにもつながり得ると考える。

研究成果の概要（英文）：In order to intervene in the empowerment of primiparas, it is necessary to be able to grasp the state of the process of becoming accustomed to the life as a mother as a transition to becoming a mother first. I think it is. Therefore, in this study, we have developed a scale as a measuring tool that can capture the transition of a primipara becoming a mother as it is. This measuring tool was created based on an interview with a primipara, and is considered to be a measuring tool that matches the actual situation.

研究分野：母性看護学・助産学

キーワード：母親 母親役割 エンパワメント トランジション 親になっていくこと

## 1. 研究開始当初の背景

母親役割獲得を促進させるには、妊娠期から育児期にわたり切れ目のない支援が必要である。このことは、わが国の心中以外の虐待死事例において0歳が最も多いことから明らかであり、産褥期から開始する支援では遅すぎる事が分かる。しかし、育児や育児期の生活、母親の心身の変化、子どもの成長・発達などについての妊娠期からの準備教育は十分とは言えず、出産後は妊娠中に描いていた生活とのギャップにより母親役割獲得への影響及びエンパワーが弱まることが懸念される。

日本の子育てに関する文化的な特徴として、日本の伝統的母親役割観がある。伝統的母親役割観とは、子どもや家族への献身が母親の愛情の証とされ、日本人の母親は、たとえ自己犠牲を払ったとしても献身的な態度を取ろうとするこの考え方は、日本人に浸透しており、母親が、子育て等に関してネガティブな思いがあったとしても、その考えは周囲の人から修正、排除されることもある。また、日本には伝統的母親役割観と同様に「男は仕事、女は家庭」という伝統的性別役割分業観が根強く存在しているこれは、総務省の社会生活基本調査において育児時間を含む家事関連時間の男女差は大きいことから言える。夫の育児時間は、欧米と比べて少なく育児が母親のワンマン・オペレーションになっているというワンオペ育児になっている。このような、日本特有の価値観や状況があることから、日本人女性には日本人特有の母親になっていく移行があると思われる。

## 2. 研究の目的

日本人初産婦のエンパワーメントにむけての支援のためには、まず母親になっていくという移行として母親としての役割のある生活になじんでいくプロセスの状態をあるがままに捉えられるようになることが必要だと考えている。よって本研究では、初産婦が母親になっていくという移行をあるがままに捉えることができる測定用具としての尺度の開発をすることとした。

## 3. 研究の方法

以下の2つの研究を日本人初産婦できるためのエンパワーメントにむけての支援に向けて実施をした。

1) 母親になっていくという移行として母親としての役割のある生活になじんでいくプロセスの把握

産後3~6ヵ月程度の日本人初産婦21名に半構造化インタビューを実施した。インタビュー内容は、母親役割になじんでいくまでの経験を捉えることができる内容とした。考案したインタビューガイドは、母性看護学の専門家4人との意見交換により表面妥当性の確保に努めた。インタビュー内容は、(a) 母親としての役割になじんでいくまでの経験、(b) 自己の振る舞い、(c) 子どもとの関係性、(d) 周囲の人との関係性とした。分析は、インタビューの録音内容を逐語録にし、それを繰り返し読み、語られた内容のうち母親になっていく移行として母親役割になじんでいくまでの経験や経験における思いについて、要約しコードをつけた。そのコードの類似点、相違点の比較を行い、共通性や関連性のあるものを集め、共通する名前をつけることでサブカテゴリーを抽出した。さらに、サブカテゴリーの共通性や関連性のあるものを集め、共通する名前をつけてカテゴリーを抽出し、母親になっていくという移行として母親としての役割のある生活になじんでいくプロセスを明らかにした。

2) 初産婦が母親になっていくという移行をあるがままに捉えることができる測定用具としての尺度の開発

尺度を開発するために、2つ(パイロットスタディ、本調査)の段階のプロセスを経た。パイロットスタディ、本調査ともwebによるアンケート調査とした。

ステージ1は、パイロットスタディを実施、尺度原案(1)の検討を行い、本調査で使用する尺度原案(2)を作成した。

ステージ2では、本調査を実施し、尺度の信頼性及び妥当性の検討を行った。

母親になっていくという移行として母親としての役割のある生活になじんでいくプロセスの把握によって得られた状態より項目案を作成した。

項目案を用いたパイロットスタディを実施し、探索的因子分析を行い、項目の検討を行った。

パイロットスタディを経て残った項目によって本調査を行った。項目分析、探索的因子分析、信頼性の検討、確認的因子分析による妥当性の検討を行った。

倫理的配慮として、web調査は、モニター登録者の管理が適切に行われ、且つモニター登録数の多い調査会社に依頼した。対象者には、研究目的、データ管理方法、同意および拒否の自由、匿名化、研究参加者の個人情報保護・権利、不利益、結果の公表についてWeb上に明記し周知をはかった。web上でのアンケートの回答を持って同意を得たこととした。外部基準の測定用具の使用は、作成者の許可を得て使用した。

#### 4. 研究成果

1) 母親になっていくという移行として母親としての役割のある生活になじんでいくプロセスの把握

カテゴリー分類を行い、「Confusion with first childcare experience」、「Suffering related to childcare」、「Cling to the image of an ideal mother」、「Internal conflict while comparing oneself to other mothers」、「Undertaking childcare by disengaging from stereotype」、「Realization of becoming a mother」、「Changing relationship with surrounding people」の7つのカテゴリーで母親役割になじんでいく過程は構成された。

2) 初産婦が母親になっていくという移行をあるがままに捉えることができる測定用具としての尺度の開発

対象者の属性

平均年齢 32.52 歳、産後 1 カ月 15 人 (17.4%)、2 カ月 9 人 (10.5%)、3 カ月 15 人 (17.4%)、4 カ月 12 人 (14.0%)、5 カ月 14 人 (16.3%)、6 カ月 21 人 (24.4%) であった。

探索的因子分析

因子数の決定は、固有値 1 以上・スクリープロットから 5 因子となった。因子抽出は、因子負荷量 0.4 未満の 16 項目、複数の因子に 0.4 以上の因子負荷量を示す 5 項目を除外し、尺度項目 62 項目が抽出された。因子と項目を質的に内容妥当性を検討し、6 項目削除、3 項目追加となり、5 因子、57 項目となった。57 項目の Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性は 0.906 であり、57 項目が本調査における探索的因子分析に適していることを確認した。

本調査

対象者の属性：

平均年齢は 31.25 歳 SD4.32、であった。標本妥当性は KMO 検定 0.906、Bartlett の検定  $p < 0.001$  となり、標本数は適切であった。

項目の統計的分析：

天井項目は 13 項目、床効果は 2 項目であった。I-T 相関分析で  $r=0.222\sim 0.722$  と一定水準の相関が見られた。この段階での項目の削除はしていない。

探索的因子分析と因子の命名：

因子数の決定は、固有値 1 以上・スクリープロットから 5 因子となった。

本調査における探索的因子分析では、因子負荷量が 0.4 に満たない 14 項目は削除をした。57 項目から 14 項目を削除した因子負荷量 0.4 以上の 43 項目及び内容妥当性の検討のために追加を検討する 2 項目を含めた 45 項目の因子構造とした。

45 項目のうち、同一因子内で内容が類似している項目が認められる場合は因子負荷量が高い項目を 1 つ残し、他項目を削除をした。第 1 因子は 5 項目、第 2 因子は 1 項目、第 3 因子は 3 項目を削除した。

第 1 因子は、自分の子育てへの力不足や自信のなさ、母親としての役割遂行が十分に発揮できていないことに関する項目で構成「母親役割の不充足感」と命名した。第 2 因子は自分にとっての子育てをしている中での子どもの存在、子どもとの生活に関する項目で構成「私にとっての子育て」と命名した。第 3 因子は子どもからの要求の理解や母親である振る舞いになってきた認識に関する項目で構成「母親役割遂行の熟達感」と命名した。第 4 因子は夫又はパートナーの父親役割遂行への思いや親としての関係性に関する項目で構成「子育てにおけるパートナーとの関係」と命名した。第 5 因子は確立した子育てでなく、自分の子育てになることに関する項目で構成「自分なりの子育て観の芽生え」と命名した。

下位因子の命名及び意味内容をもとに内容妥当性の検討をした。第 1 因子で 2 項目、第 2 因子で 1 項目、第 3 因子 1 項目、第 4 因子で 1 項目を内容妥当性が低い項目とし削除した。第 5 因子で 1 項目、第 6 因子で 1 項目を内容妥当性の検討により下位因子に必要な項目として追加した。

これにより、第 1 因子 10 項目、第 2 因子 8 項目、第 3 因子 6 項目、第 4 因子 3 項目、第 5 因子 3 項目の 30 項目を抽出した。

信頼性・妥当性の検討：

各因子の Cronbach's 係数は、第 1 因子 0.871、第 2 因子 0.870、第 3 因子 0.751、第 4 因子 0.767、第 5 因子 0.648 であった。基準とした 0.7 を下回る第 5 因子の項目間相関を確認した。項目間相関が一定程 ( $r=0.347\sim 0.465$ ) みとめられた。

妥当性の検討：

併存妥当性として 3 つの外部基準と本開発尺度の相関係数を確認した。養育意識・行動尺度では  $r = -0.459 (p < 0.01)$  と負の相関を認め、母親役割の自信尺度  $r = 0.394 (p < 0.01)$ 、母親であることの満足度尺度  $r = 0.569 (p < 0.01)$  では正の相関を認めた (表 4)。

探索的因子分析で得られた結果に基づく仮説モデルにデータが一致するかを検討するため、確認的因子分析を行った。分析の結果、適合度指数は、CFI = 0.816、GFI = 0.812、AGFI = 0.779、RMSEA = 0.073 であった。

#### 3) 考察

本尺度は、母親としての役割のある生活になじんでいくという移行のプロセスの中にある産後 6 ヶ月までの日本人初産婦のインタビューをもとに作成された。対象者の生きた声から母親になっていくという移行の状態を具現化した 5 つの下位因子で示すことができている。尺度全体及び下位因子別を得点化することによって、母親としての生活のどの部分にどの程度なじん

でいるかをアセスメントできるツールとして活用することができる。また、産後の異なる時期に回答することで経時的な変化も可視化できる。

本尺度は、単に点数の高低ではなく、その母親自身が母親としての役割のある生活になじみつつある過程にあることへの気づきにつなげ、エンパワーメントにつなげることもできる。母親は、回答することを通じて、自身の母親としての役割のある生活になじんでいく過程であると気づき、自身の子育てを内省できると考えている。先行研究では、母親としての成長の気づきや自身の子育てについての内省が促されることは母親の成長の一助になるとされている、よって、本尺度に母親が回答し、項目らに向き合う事は、自らの内省をとおして、母親としての成長を促進させることにもつながり得ると考える。

本研究の更なる実用化に向けては、各下位因子間の関連や 5 下位因子及び全体得点のバランスの意味を検討及び尺度の使用時期及び間隔の検討が必要である。今後、ローリスクの母親以外にも対象を広げ、産後うつや育児ストレス尺度などハイリスクな状態を把握できる尺度と本尺度の関連を検討したいと思っている。これらの検討により、様々な状況下にある母親への個別的な支援に繋がると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Youko Katou, Mitsuko Okamura, Mitsuko Ohira	4. 巻 9
2. 論文標題 Transition to motherhood for Japanese primiparas from delivery to 6 months postpartum: A qualitative study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Nursing Open	6. 最初と最後の頁 490-499
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/nop2.1087	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤 陽子, 岡村 光子, 大平 光子
2. 発表標題 初産婦の出産後の親役割へのトランジション 親としての振る舞い、子ども及び周囲との関係性
3. 学会等名 日本助産学会誌
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 加藤 陽子, 岡村 光子, 大平 光子
2. 発表標題 初産婦の出産後の親役割へのトランジション 親役割が始まってからの経験に焦点をあてて
3. 学会等名 日本助産学会誌
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大平 光子  (Ohira Mitsuko)  (90249607)	広島大学・医歯薬保健学研究科(保)・教授    (15401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	岡村 光子  (Okamura Mitsuko)  (70806687)	久留米大学・医学部・助教     (37104)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関